

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520425  
 研究課題名（和文） 初期近代英語期における歴史語用論的観点からの文法化・主観化研究  
 研究課題名（英文） Grammaticalization and Pragmaticalization of Early Modern English from a viewpoint of Historical Pragmatics  
 研究代表者  
 福元 広二 (FUKUMOTO HIROJI)  
 鳥取大学・地域学部・准教授  
 研究者番号：60273877

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、初期近代英語期における 1 人称代名詞や 2 人称代名詞と動詞とが結びついた句談話標識と呼ばれる挿入詞の歴史的発達を文法化・語用論化の観点から行ったものである。その結果、談話標識が統語的には、文頭の位置から、次第に文中や文末にも起こるようになり、意味的には、ほとんど意味をもたないようになり談話標識として機能していくことが明らかになった。

## 研究成果の概要（英文）：

This study aims to investigate the historical development of phrasal discourse markers in the Early Modern English period where the 1<sup>st</sup> person pronoun or 2<sup>nd</sup> person pronoun and a verb are collocated from the viewpoints of grammaticalization and pragmaticalization. As a result, some expressions frequently came to be used in the middle or final position as well as in the beginning of the sentence. In addition, it is concluded that bleaching of meaning of phrases occurred

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：英語学・英語史

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史・文法化・主観化・英語学・語用論・初期近代英語・談話標識

## 1. 研究開始当初の背景

英語史における文法化・主観化研究は、Hoopper and Traugott (1993) の *Grammaticalization* により始まり、その後、生成文法、認知言語学、コーパス言語学などの発達により、様々な方向へと領域を拡大しながら研究が進められている。近年は、その一つの新しい流れとして語用論的な枠組みからのアプローチが始まってきている。例えば、*The Handbook of the History of English* (2006) においても、Pragmatics という章が設けられ、Traugott、Brinton などが寄稿している。これは英語史における語用論的なアプローチへの関心の高まりを示すものである。

また、コーパス言語学においても、Helsinki Corpus をはじめとする歴史的電子コーパスを用いて、様々なジャンルの比較を行う社会言語学的なアプローチや言語形式の語用論的意味の出現と通時的変遷を追う語用論的なアプローチも盛んになってきている。最近では、国際英語史学会や国際コーパス学会などでもこの文法化に関する研究が増えてきている。

語用論的な枠組みからの文法化研究は、もともと Traugott の一方向化に関する一連の研究や、Sweetser (1990) などに始まり、最近では、歴史言語学の国際学会などで取り上げられるようになった (2002 年の第 12 回国際英語史学会 (ICEHL) や 2003 年の第 16 回国際歴史言語学大会)。国内においても、2005 年 12 月の日本語用論学会において「歴史語用論：その可能性と課題」というテーマで国内初の歴史語用論に関するシンポジウムが行われた。このシンポジウムのメンバーを中心として歴史語用論研究会が発足し活動を行っている。

申請者はこれまでも談話標識の文法化研究を語用論的な枠組みを用いて分析してきた。Traugott や Brinton のような歴史言語学としての文法化研究では、言語理論、特に一方向化ばかりを追いつぎすぎると感じ、もう少し、話し手と聞き手とのコミュニケーションや話者の心的態度などがどのように誘導推論 (invited inference) に影響を及ぼすのかを主に分析している。そして、これまでは Shakespeare を中心とする初期近代英語期の劇作品を対象として、劇における、登場人物の社会的な立場や役割などの観点から、発話動詞の文法化

について主に文体的・社会言語学的な観点から調査を行ってきた。

## 2. 研究の目的

本研究は、歴史語用論からの英語史研究、具体的には、文法化・主観化・間主観化研究を行う。取り上げる言語項目としては、1 人称主語か、2 人称主語と動詞が結びついてできる挿入詞 (Parenthetical) の調査を行う。このような表現は、Brinton and Traugott (2005) では、Phrasal Discourse Marker として扱われている。1 人称主語や、2 人称主語と動詞から成り立っている挿入詞は、本来は文主語と本動詞という機能を担っていたわけであるが、次第に文頭から文中・文末にも移動可能となり、最終的に挿入詞、談話標識へと発達していくのである。例えば、1 人称代名詞と動詞とが組み合わさった *I mean, I think, I guess, I suppose, I reckon, I pray you, I pray thee, I thank you, methinks* などや 2 人称代名詞を含む *you see, you know* などである。また、主語付きの命令文として、*look ye, look to it, hark ye, mind you, mark you* などがある。このような項目はこれまで、個別的には文法化の一方向性という観点から行われてきたが、基本的には統語的な分析が中心であった。

そこで、本研究においては、これらの句談話標識が「主語+動詞」のパターンから談話標識へと脱範疇化していった過程を文法化理論で検証していく。具体的には、1 人称主語、2 人称主語と動詞から成り立っている挿入詞 (Parenthetical) が歴史的にどのようにして認識的な意味を獲得してきたのか、またいつごろから語用論化されてきたのかを検

証する。またこれらの挿入詞が法助動詞、法副詞などのモダリティと共起する場合には、さらにどのような文体的・語用論的効果がもたらされるのかについても考察する。

また、2人称主語と動詞から成り立っている挿入詞の場合は、2人称の人称代名詞に着目する。初期近代英語の2人称代名詞は *you* と *thou* との2系統から *you* に統一される時期でもあり、また言語自体は、統合的言語から分析的言語への転換が進み、屈折もほぼなくなり、言語のバリエーションは文体的となる時期である。このような状況が、人称代名詞を含む挿入詞 (Parenthetical) を含む構文の文法化にどのような影響を与えているかも考察する。

### 3. 研究の方法

研究方法としては、具体的には、1人称主語か、2人称主語と動詞が結びついてできる挿入詞の例をすべて拾い上げる。この場合当然ではあるが、肯定文のみを扱い、否定文や疑問文は除外する。次に統語的な観点から、まずは「主語+動詞」の位置を調査する。このパターンが文頭、文中、文末のどこに生起しているかを分析する。次にそれぞれの位置における環境を考察する。まず文頭にくる場合は、補文としてどのようなパターンが多いのかを調べる。文中や文末に起こり、文法化が起こりやすい環境はどのような場合かも明らかにする。そして、文法化が進み、挿入詞として使用されている場合は、どのような環境において多くみられるのか、その統語的な環境も調査する。

また、意味的な観点からは、挿入詞における動詞の原義が文法化が進むにつれて次第に意味の漂白化が起こっていくのかに焦点が当てられる。動詞の意味が命題内容を表す段階

から、次第に文と文をつなぐ接続的なテクストの意味、さらには談話標識的な感情表出的へと変化していくとするTraugott(1982)の理論に合致したものであるかを検証する。

### 4. 研究成果

初期近代英語期における1人称代名詞や2人称代名詞と動詞とが結びついた句談話標識となる挿入詞の歴史的発達の分析を文法化・語用論化の観点から行った。

まず、2人称代名詞と動詞とが結びついた *look you* の談話標識において、*you*の代わりに *thou*や *thee*などの人称代名詞が見られる場合において、どのような特徴がみられるかを考察した。その結果、*Look you*における *look*の意味が、「気をつける」の場合は、この表現のあとに動詞を従えることと、上流の登場人物から下層の人物に向かって用いられることが明らかになった。また、*Look you* が *look*自体にほとんど意味がなく、文中や文末などで談話標識として使われている場合は、下層の人物に多く見られるという結果となった。

また、*Look thou*の場合は、談話標識の例はなく、*look*の意味としては、「取り計らう」となり、上流の登場人物から下層の人物に向かって使われている。さらに、*Look thee*の場合は、*look*の意味は、そのほとんどが視覚的な「見る」という意味になり、これを使用するには、召使や劇のなかで滑稽に描かれている人物であった。

次に、1人称代名詞と動詞とが結びついた挿入詞においては、挿入動詞の中でも、特に思考動詞と認識動詞を取り上げた。その結果、初期近代英語期の16世紀と17世紀においては、Comment Clauseの頻度はまだかなり少ないことがわかった。特に *I suppose, I believe,*

*I guess* は、16 世紀では用例が少なく、17 世紀後半になって、ようやく増加してくることがわかった。ただ、*I think* だけは、16 世紀と 17 世紀を通して頻度が高いという結果が得られた。次に、初期近代英語期における主節から Comment Clause への発達という観点から見ると、*I think* や *I trow* において、母型文としての用法から、Comment Clause としての用法、さらに間投詞のような談話標識へと発達していく様子が見られた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1

福元広二、「初期近代英語における談話標識 *Iook you* の文法化について」、『英語英文学研究』、査読有、51 巻、2007、pp. 19-27.

[学会発表] (計 3 件)

1

福元広二、Grammaticalization of Imperatives with a Pronoun in Early Modern English、11<sup>th</sup> International Pragmatic Conference、2009 年 7 月 14 日、メルボルン大学 (オーストラリア)

2

福元広二、初期近代英語における Comment Clause、第 26 回近代英語協会、2009 年 5 月 29 日、日本大学

3

福元広二、Pronominal variation in Imperative in Early Modern English、Poetics and Linguistics Association 2008、2008 年 7 月 24 日、シェフィールド大学 (イギリス)

[図書] (計 2 件)

1

福元広二、「Shakespeare における命令文主語と文法化」『英語研究の次世代に向けて』吉波弘、他 (編) ひつじ書房、2010、pp. 361-372

2

福元広二、「初期近代英語における Comment clause」『Comment Clause の史的研究—その機能と発達—』秋元実治 (編) 英潮社、2010、pp. 111-126